

Monkshaven の描写から見る *Sylvia's Lovers* における孤立と分裂

平野 惟

1. はじめに

Gaskell は 1862 年の書簡において、やがて *Sylvia's Lovers* (1863 年) として出版される作品の題名案の一つとして、“Specksioneer” や “Philip’s Idol” と共に物語の舞台である港町 Monkshaven の名前を挙げている。この題にはいかにもひねりがなく、作者も “very stupid” (*Letters* No. 501) としてすぐ取り下げってしまうのだが、本作がよくそのように評価される「歴史小説」の題としては、これでなんら不足はないようにも思われる。裏を返せば、作家が敢えて “*Sylvia's Lovers*” という題名を採用したこの物語は、やはり単に一地方の激動の時代を客観的に語ることよりは、より低い個人の視点へ降りた時にこそ見えてくる世界を描くことを目指したものであるのだと言えるだろう。

しかしながら、小説の最後に描かれる「現在」の Monkshaven は “rising bathing-place” (429) となっており¹、読者はこれまで寄り添ってきた登場人物たちがほぼみな故人となっていること、数百頁にわたって見届けてきた物語がかなり歪曲された形でしか伝えられていないことを知る。“*Sylvia's Lovers*” の物語は、いまや “the tradition of the man who died in a cottage somewhere about this spot, died of starvation while his wife lived in hard-hearted plenty not two good stone’s-throw away” (430) でしかなくなっているのだ。それは渦中の人物すべてが口を閉ざすに至ったことで、すでに完全に忘れ去られた物語なのである。その意味で *Sylvia's Lovers* は、言葉によって表される歴史の内容自体ではなく、言葉にされない人々の生活を歴史が呑み込み、個人の名前が漠然とした普通名詞へとその輪郭をぼやけさせていく様を描いた、「歴史小説」としてはいささか特異な性格のものであると言えよう。

本作における Gaskell の手並みには、ドラマを語る小説家としての語り口と時代の文脈を語る歴史家としての語り口を適宜使い分け、ちょうど Monkshaven の人々が岸壁の裂け目に密輸品を隠しているようにして、登場人物の個別の行動が文脈のうちにおいて果たす意味合いを語らずに残しておくような所がある。もちろん大半

の含意は読者に対してその場で開示されるのではあるが、作家が19世紀半ばにおいて言うまでもないものとして放置しておいたものの中には、150年あまりを経て改めて取り出されるべきものも幾らかはあろう。本稿では敢えてこの物語における個人的な視点を離れ、物語が進行している間のMonkshavenを鳥瞰しつつその変遷を追ってみたい。この町の住民たちは概して自省の能力に欠け、良く言えば素朴で、悪く言えば周囲に感化されやすい。そのためしばしば群衆化し、SylviaやPhilip Hepburnの運命に先駆けて、個別の名前を持たないまま大通りや市場を動き回っている。Sylvia RobsonやPhilip Hepburnといった人物たちは、この中からどのようにして名前を持って立ち現れ、物語を通して描かれる葛藤の当事者となったのち、最後にはまた匿名へと戻っていくのだろうか。

2. *Sylvia's Lovers* の舞台設定について

物語の舞台であり、イングランド北東部のWhitbyがモデルであるとされる港町Monkshavenは、様々な異なる領域を結び付けながら、それ自体が一つの特異点でもある。かつて僧院が“the vast ocean that blended with the distant sky” (1)に臨んでそびえ、“a throneless queen” (1)を迎えたこともあるこの開けた町は、しかし北海と茫漠たる荒野とに囲まれた陸の孤島としての側面も持っている。一帯の名産である毛織物の集散地としての役割を果たす一方、代々に渡る捕鯨産業によって独特の繁栄を遂げており、そのためMonkshavenの住民たちは、鯨油の悪臭に親しみながら“the odours of train-oil” (2)には我慢ができないという独立自尊の精神を持っている。Deirdre d'Albertisも言うように、こうした重要かつ個性的な土地柄こそ、Gaskellが1859年11月の取材旅行においてWhitbyに認めたものであり、そこから小説の舞台としてMonkshavenという町を創造した最大の理由であったろう (d'Albertis 108)。

1793年に勃発した対仏戦争のため、イギリス海軍は緊急動員令のもと拉致同然の荒っぽいやり方で水兵を集め始めた。あらゆる港が海軍の支配下に置かれ、出入りする全ての船が監視された。水夫に限らず商人や貿易業者、果ては単に頑丈な身体つきをした男までが強制徴兵隊の標的とされ、一家の大黒柱が“the near grasp of parents or wives” (6)という所で蒸発してしまう悲劇が頻繁に見られる時代であったという。

Somehow in this country sea thoughts followed the thinker far inland; whereas in

most other parts of the island, at five miles from the ocean, he has all but forgotten the existence of such an element as salt water. The great Greenland trade of the coasting towns was the main and primary cause of this, no doubt. But there was also a dread and an irritation in every one's mind, at the time of which I write, in connection with the neighbouring sea. (4)

強制徴兵隊の横暴に対して（語り部いわく）比較的従順である南部の人々に対し、Monkshaven の住民たちはほとんど過激なまでの反抗を示す。町を挙げて徴兵隊に対立し、罵声を浴びせ、鯨漁用のナイフで武装し、果ては隊の集会所となっていた宿屋を焼き討ちしさえする。しかし古来の当然の権利と自分たちが考えてきた振る舞いに対して国家がこうも断固たる態度を取ることは、やはり戸惑いを感じている。Sylvia とその恋人たちにまつわるこの物語は、特異なる Monkshaven にとってさえ特異な時代、慣れ親しんできたはずの海に向ける住民たちの視線が、それまでとは違った不穏な翳りを帯びつつあった時代に起こったのである。

3. Monkshaven の教会

海は Monkshaven のあらゆるものに浸透している。船出の時にはそこで聞いた説教の文句が思い出され、帰港の際にはその塔が目印にされる教会にも、この地に浸透する海への思いが“a little originality” (57) を与えている。墓地は海で亡くなった者の名前を記した記念碑で埋め尽くされ、見る者に冷たい潮風が亡霊を運んでくるかのような“a strange sensation” (55) をもたらす。

このような町において海の印象が変わり始めることは、とりもなおさず住民たちの価値観や精神的な拠り所の根本的な変化を予告する。教会は物語に登場するなり徴兵隊に射殺された船員の葬式を執り行うのであり、牧師は既に地元の判事として、徴兵隊の正当性を弁明する軍からの手紙を受け取っている。フランス人よりもむしろ非国教徒の方を恐れている牧師は、教会の庭師として雇っている船員の老父を慮りつつも、なるべく当たり障りのない文言を聖書から選んで朗読するのである。

語り手はここで 18 世紀の人々の“the power of putting two things together, and perceiving either the discord or harmony thus produced” (58) の乏しさを問題とし、このとき Monkshaven に生じている葛藤、この葬儀そのものに満ち満ちている矛盾について述べる。

[...] Will our descendants have a wonder about us, such as we have about the inconsistency of our forefathers, or a surprise at our blindness that we do not perceive that, holding such and such opinions, our course of action must be so and so, or that the logical consequence of particular opinions must be convictions which at present we hold in abhorrence? (58)

そもそも水夫の死は強制徴兵隊の無法行為の結果なのだから、これは Monkshaven に暮らす人々の矛盾についての指摘である以上に、この時代全体に罷り通っていた不条理についての評言であろう。少なくとも、この後にも続く思索の最後を締めくくる “It is well for us that we live at the present time, when everybody is logical and consistent” (58-59) という言葉には皮肉を感じずにいられない。彼らの時代にはここまで大きな生活との不協和音を伴って強いられた国民としての意識を、現代のわれわれは今やほとんど当たり前のものとして内面化するようになり、往々にしてただ現在の政府の方針であるというだけのことを、逃れがたい宿命のように受け容れてしまうようになっているのだから。息子の死に納得できずにいた庭師の老人は、皮肉にも説教の終わりにはこれを “It is the Lord’s doing” (60) と考えるようになる。もちろん老人が思っているのは神のことであるが、実際にはこの悲劇は貴族たちの、またその意向を汲む議員による仕業なのである。この “Lord” に造物主と違うところがあるとすれば、それは神に仕える牧師が衝突する価値観を執り成す術を心得ていたのに対し、王に仕える役人たちは意見の食い違う相手を絞首刑にする力を持っていたということであろう。

4. Monkshaven の市場

「塔には求道の精神につらぬかれた宗教信仰があり、広場には実利とたのしみを求める市民生活がある」(梶谷 28) という見立ては、全ての街に適用できるものはさておき、Monkshaven に関しては十分妥当であるように思われる。歴史に残らない人々の暮らしを拾い上げようとする作者の関心からしても、教会よりはこちらで起こる事件にこそ見るべきものがあると思われる。Monkshaven においては、川沿いの大通りと橋通りとが交差する四つ辻の辺りが広場の役割を果たしていると言えよう。Molly Corney と連れ立って初めて登場したとき、Sylvia はまさにここで立つ市に向かっているのであり、やがて Philip と結婚した時には、この市場に面して建つ洋品店の裏手の家に移り住むことになる。

イングランドにおける町市場の性格は様々あるが、Monkshaven のこの市場については多くの情報が書き込まれており、Whitby の実際の歴史と照らしつつ、大体の形成経緯を推定することができる。かつて修道士がそこへ建てた石の十字架にちなんで“Butter Cross”と呼ばれていること、十字架の宗教的シンボル性がこの時代にはすっかり忘れ去られていること、定期的に領主家の従僕がやってきて諸々のニュースを触れ回ること(13)などから窺い知れるのは、第一にこの市が純然たる地域住民の品物取引のための market であり、教会の祝日に発する fair のような祭の性質を持つものではないということ、第二には領主の有する市場開催権に基づいて行われる公開市場 open market であるらしいということである。

この open とは単に開催場所が開けているとか、近隣住民に開かれているということを表すのではない。領主権によって規定され、market cross を目印とするような由来の古い市場においては、多くの場合近くに度量衡の標準器を備えた会館が設置され、取引の信頼性はこの標準器を用いた厳格な計量によって担保されていた。品物の遣り取りは所謂モラル・エコノミーに則った適正な監理のもと、衆人環視の中で行われることが肝心であったのだ(道重 159-63)。

Monkshaven の場合、おそらく作中で「市場の会館」“market-house”(220)として言及される施設がこの標準器を保持しているのだが、物語に描かれる 18 世紀末の時代には、おそらく活躍の機会は減多になかったものと思われる。第 2 章で描かれる Sylvia たちの商いの様子からは、すでに取引規制がかなり緩やかになっていることが窺われる。彼女たちは市が閉まると売れ残りを店へ持っていき、値段を下げて売ることが紹介されているように(9)、この時代にはすでに見本品取引や店舗販売といった市場を介さずに行われる商売が一般的になり、市場のごとき公的な商品取引の場の重要性は相対的に薄れ始めていたのである。

Coral Lansbury が指摘するように、Monkshaven の未来はグリーンランド海で鯨を追いかける船乗りたちではなく、いち早くこの市場から店舗への転換を主導し、のち銀行業に転じたクエーカー教徒の Foster 兄弟たちの方に寄り添っている(Lansbury 167)。市場が開かれた取引の場であるという点に注目するとき、むしろ見逃せないのは、Monkshaven の住民たちが町ぐるみで密輸に手を染めていることであろう。税務官までグルになっているのだから、ある意味こちらが公に成り代わっているのだとも言えよう。こうしたところに表れる住民たちの自負と一種の驕りとが、“This ill-will, to be sure, is mostly of a negative kind; its most common form

of manifestation is in absence of speech or action, a sort of torpid and genteel ignoring all unpleasant neighbours;” (7) と表現されるような、強制徴兵隊の横暴から彼らを守ってくれる力を持つはずの貴族たちの反感を引き起こしているのである。

市場とは本来、行商人の移動や彼らが持ち込む品物・情報の遣り取りによって、その町が空間的な広がりとの外の世界との繋がりの中にあることを印象付けるものであろう。しかし見てきたように様々な意味で孤立し始めている Monkshaven においては、メインストリートの活気は往々にして怒りや悲しみに満ちた群衆の光景か、Philip の個人的な絶望を引き立てる書き割りとして描かれる。Kinraid の帰還によって自らの裏切りが露見した Philip が失意のうちに家を出たのもまた、市の立つ水曜日のことであった。

そして何よりもこの市場は、作中で最初に徴兵隊の襲来による混乱が描かれる場所にして、後半の悲劇の最大の原因たる事件の現場となる。市場会館に備え付けられた鐘が突然鳴り始め、男たちは造船所か鯨油工場から火が出たものと思って一斉に駆け付ける。しかしそこに火事は見当たらず、暗闇の市場に鐘が鳴り続ける不気味な光景だけがある。“They were at the heart of the mystery, and it was a silent blank!” (221) という描写のもと現れるこの空白こそ、Monkshaven の船乗りたちがついに気づかずきた貴族たちの反感と悪意なのだ。それらは表面化する時でさえ沈黙と無視を貫いており、彼らをまるで人間扱いしない。やがてどこからともなく徴兵隊が襲い掛かり、市場はパニックに陥る。船乗りたちが鯨との戦いにおいて発揮している “that strange love of the chase inherent in every man” (9) を、徴兵隊たちは同じ人間であるはずの Monkshaven の住民に対して向けるのである。

5. Monkshaven の祝祭

広場にはもう一つ、祝日の祭や娯楽市 (pleasure fair) の会場としての役割がある。*Sylvia's Lovers* においてこうした祭が直接に描かれる場面はないが、祝祭のモチーフは要所で顔を出して、良く言えば素朴な、悪く言えば偏狭な Monkshaven の気質を演出している。外部に開かれた市の描写がある町の周囲との関わりを示すとすれば、町ぐるみで祝われる祭の場にはその内部の状況が表れると見ることができだろう。

この作品の執筆にあたってギヤスケルが参考にした *A History of Whitby and Streoneshalh Abbey* (1817) によれば、*Sylvia's Lovers* の頃の Whitby には二つの祝祭の日がある。一つは 8 月 25 日に行われる聖ヒルダ祭、もう一つが 11 月 11 日の聖マ

ルティヌス祭である²。このうち後者は度々言及されており、Daniel Robson の誕生日でもあるらしい (240)。Whitby の歴史により深く根付いているのは聖ヒルダ祭の方であるかも知れないが、Monkshaven の住人にとっては、海から帰ってきた男たちを加えて迎えることのできるこの日の方が重要であるようだ。縫物師 Donkin はこの日に向けて家々の晴れ着を繕って回り (41)、女たちはこの日までにクリスマス用の牛肉を塩漬けにする (73)。

男たちの帰還する秋は、時に死の報せを伴いながらも、全体として明るく晴れの時期である。港を見渡す場所に積み上げられた材木の山に登った少女たちは、まさに古代の祝祭におけるように体を揺らし、足を踏み鳴らしながら歌を唄う (“Weel may the keel row, the keel ro, the keel row...”) (17)。しかしこれは、徴兵隊の襲来によって “a Greek Chorus” (25) と化してしまう。

[...] Some of them looked scarce human; and yet an hour ago these lips, now tightly drawn back so as to show the teeth with the unconscious action of an enraged wild animal, had been soft and gracious with the smile of hope; eyes, that were fiery bloodshot now, had been loving and bright; hearts, never to recover from the sense of injustice and cruelty, had been trustful and glad only one short hour ago. (25)

開巻間もなく Sylvia が目にした 1796 年 10 月の襲撃は、実にアメリカ独立戦争時以来の強制徴用の現場であった。以後の度重なる騒擾と絶えざる監視の恐怖によって、町はそれから一年の間にすっかり様変わりしてしまう。11 月にはヨークシャー沿岸に警備艦が頻繁に現れ始め、方々で町民と徴兵隊との衝突が起こるようになる。Monkshaven で船員たちの帰還はもはや祝われず、行き場を失った祝祭のエネルギーは、護身用に持ち替えられた鯨漁用ナイフの中、酒場で酔った男たちが立てる復讐の誓いの内に蓄積する。明けた 1798 年 2 月 23 日の事件においてそのエネルギーはとうとう爆発し、徴兵隊の集会所を燃やすことになる。

第 3 章で怒り狂った女たちが演じたコロシア、第 23 章の襲撃で市場から逃れた男たちが集まってきた教会の石段でも繰り返される。一帯は月明かりで銀色に照らされ (222)、男たちは昔ながらの市日の習慣に従って酒に酔っている (228)。

[...] Here and there, a woman, with wild gestures and shrill voice, that no entreaty would hush down to the the whispered pitch of the men, pushed her way through the

crowd—this one imploring immediate action, that adjuring those around her to smite and spare not those who had carried off her “man,”—the father, the bread-winner. Low down in the darkened silent town were many whose hearts went with the angry and excited crowd, and who would bless them and caress them for that night’s deeds. (223)

年をとって体重も増え、リウマチで足を引きずっている Daniel は、酔いのせいで一時的な “fictitious youth” (222) の状態に陥った結果、海軍の集会所に通じる細い一本道の先の穴を発見し、そこを通る最初の人間になってしまう³。太った身体を後ろから押し出してもらふ姿はユーモラスだが、その結果はこの上なく深刻である。浮かれた Daniel は “If a was as young as onest a was, ad have t’ Randyvow down, and mak’ a bonfire on it. We’d ring t’ fire-bell then t’ some purpose.” (225) と放言し、かくして狂乱の世界に転じた Monkshaven に、人々が炎上する集会所を囲んで歓喜の叫びを上げるカーニヴァルが現出する。

Daniel は妻のように言葉の含意を解さないために (13)、自分たちの町を覆うルールがいまや昔とは異なったものになりつつあることを認識していない。持ち前の素朴な優しきで火の迫る小屋から牛を助けるとき、Daniel はそれが言わば犠牲の動物の身代わりを引き受ける象徴的な行動となることに気が付かない。新しいルールは、男たちが “a sort of seething the kid in its mother’s milk” (221) たる暴虐に対する当然の制裁として考える行動を、否応無しに絞首刑に値する反逆行為へと変えてしまうのである。そればかりか彼らの行動は、すでにルールを乗り換えている人々に対する今一つの暴虐でさえある。直後に Daniel は、海軍へ宿を提供していた Simpson と出くわす。全財産を失った Simpson は涙ながらに先導者を糾弾するが、“not in the habit of feeling any emotion at actions not directly affecting himself” (226) である Daniel はまるで取り合わず、二人の会話はとうとう囁み合わないままで終わる。Gaskell は先だって水夫の葬儀が行われた秋の終わりを以下のように描写しているが、Daniel と Simpson が次の夏を迎えずして翌年のほぼ同時期に命を落とすのを知った上で読むと、実に無常の感を禁じ得ない。

It seems a time for gathering up human forces to encounter the coming severity, as well as of storing up the produce of harvest for the needs of winter. Old people turn out and sun themselves in that calm St.Martin’s summer, without fear of “the heat o’ th’ sun, or the coming winter’s rages,” and we may read in their pensive, dreamy eyes that

they are weaning themselves away from the earth, which probably many may never see again dressed in her summer glory. (54)

Simpson に真に必要なのは半クラウンと 2 ペンスの現金ではなく、おそらく彼と同じような孤独を感じていたであろう Philip が理解する通り (285)、過ちや意見の違いを受け止めた上で優しい言葉を掛けてくれる人間であったろう。そうした孤立しつつある人間に石を投げることもまた、役人たちが Monkshaven に示すのと同じ一つの不寛容なのである。Monkshaven は町として孤立しているのみならず、ちょうど川の流れが町全体を二つに分けているように、内部においても分裂し始めていたのだと言えよう。

6. Monkshaven の川と海

Daniel が示した、この無知ゆえに自らに跳ね返ってくる不寛容は、やがて娘の Sylvia によって引き継がれ、Philip に対して繰り返されることになる。John Foster がかつて Alice Rose に思いを寄せており、自分と同じように捕鯨船の船乗りがその恋敵であったという昔話を聞かされた Philip は、歴史の循環性に想いを馳せ、その再現において自分の行動が正当化されることに期待を懸ける。

Philip fell to thinking; a generation ago something of the same kind had been going on as that which he was now living through, quick with hopes and fears. [...] [W] as that to be Sylvia's lot? —or, rather, was she not saved from it by the event of the impressment, and by the course of silence he himself had resolved upon? Then he went on to wonder if the lives of one generation were but a repetition of the lives of those who had gone before, with no variation but from the internal cause that some had greater capacity for suffering than others. Would those very circumstances which made the interest of his life now, return, in due cycle, when he was dead and Sylvia was forgotten? (207)

しかし結局のところ、Monkshaven があるのは全体として不可逆な直線的变化の最中である。Kinraid の帰還によって Sylvia に拒絶され、英雄となって妻に見直されたいという願いを抱いて海軍へ入隊した Philip は、今度は過去の出来事を意に沿わない形で繰り返させられる羽目になる。Stephen Freeman として敵の銃弾に倒れた

Kinraidを救う彼は、さながらかつてフランス軍に捕らえられた Kinraid を救出した “Philip something” (330) の再来となる。帰国の後に St. Sepulchre 慈善院で “mill-wheel circle of ideas” (398) を回すような物思いに耽りながら、Philip はふと手に取った本に書かれていた Warwick 伯 Sir Guy の伝説に心を留め、自分もこのように妻を迎えてもらえるのではないかという希望を抱いて Monkshaven に戻ってくる。しかし彼と一緒に町へ入ったサーカス団の人々は、煌びやかな物語の主人公の衣装の下で寒さに震えているのであった (402-03)。

Sylvia を自ら作り上げた偶像の中に閉じ込めてしまった Philip は、言わば変わりゆく時代の中であって変わろうとしないこの Monkshaven の磁場に当てられたのではないだろうか。彼は機を見るに敏な Foster 兄弟のように新しいルールを是認しながらも、肝心なところで回帰を夢見てしまう。そうして Monkshaven の人々が被った抑圧を Sylvia に、孤独を Hester に強いた上で、拳句には自分でもそれらを引き受ける羽目になるのである。

橋の上で初めて娘の言葉を聞いた Philip が流す涙は、川に運ばれて真っ直ぐに海へと流れ出していく。そうして「彼が死に、Sylvia が忘れられた」今となっては、われわれに触れることができるのは間違って伝えられた物語と、海の向こうから絶え間なく無意味に寄せ返してくる波の音だけなのである。

7. おわりに

以上、Monkshaven の主に教会と市場での出来事を取り上げながら、各々の描写が表している町の状況がどのようなものであったかを分析してきた。海と陸の境界に立地し、聖と俗、生と死の間を取り持つ教会は、作中においてはまだ政府の意向を市民に呑み込ませるための調停役をも負わされている。市場は作中において、もっぱらこの町自体の孤立を演出する場になっている。また両方について、通常時の機能（道徳的指標ないし住民の一体感醸成の場としての教会・集合と情報伝達の場としての市場）を逆に利用され、事件に際しては Monkshaven の増長に対する貴族や政治的権力者の側からの報復手段となっていることが認められよう。

徴兵隊をめぐる Monkshaven の物語と結婚生活をめぐる Sylvia の物語は、男性と女性、身体的自由と精神的自由、国家の抑圧と家庭の束縛といった領域を分け持ちながら進行し、大まかには第 23 章の集会所焼き討ち事件を境にして前者から後者へと移行するのであるが (d'Albertis 104-06)、共に人間の主体性と法や制度による定めとの衝突に起因し、共に最後には中心人物の沈黙をもって決着するこの二つの

物語は、一つの小説の前半と後半とで同じテーマを反復していると言える。その意味で先に語られる Monkshaven の物語は、より個人的で現在では忘れ去られている Sylvia の物語を予告し、かつその読みを規則付ける拡大鏡の役割を果たしていると見ることができよう。その上で読者は、同じ構造の問題でありながら片方の日付と名前が歴史の一部として記録され、もう片方がただ忘れられていくことを想うのである。

Sylvia's Lovers は個人が沈黙し、社会においてその名前が忘れられる様を描いているが、それでいてただ個人についての物語でも、また社会についての物語でもないように思われる。敢えて言うなら、特殊性を備えた小さなもの (Sylvia や Monkshaven) と、それを内包する大きなもの (Sylvia に対する Monkshaven または Monkshaven に対する中央政府) との関係性についての物語であろう。独立しつつ孤立している場に時代の流れはどのように作用し、どのような反発を受けてどこへ落ち着くのか。環境や教育、あるいは運に恵まれなかった人間の不幸はいつか改善され得るのか、それともただ繰り返されるのか。筆者には Gaskell が、Monkshaven という箱庭を使ってその実験を試みたように思われるのである。

注

1. Elizabeth Gaskell, *Sylvia's Lovers*. J. M. Dent & Sons, 1914. より引用。以後作品中からの引用は「本文 (頁数)」で示す。
2. George Young, *A History of Whitby and Streonshalh Abbey; with a Statistical Survey of the Vicinity to the Distance of twenty-five miles*. vol. 2 (Clark and Medd, 1817) p.571 参照。
3. ここにも第 3 章における町の女性と子どもたちの反抗の反復が見られる。“[T] he vanguard of the crowd came pressing up Bridge Street, past the windows of Foster's shop. It consisted of wild, half-amphibious boys, slowly moving backwards, as they were compelled by the pressure of the coming multitude to go on...” (25).

引用文献

Chapple, J. A. V, and A. Pollard, editors. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester UP, 1966.

d'Albertis, Deirdre. *Dissembling Fictions: Elizabeth Gaskell and the Victorian Social Text*. Macmillan, 1997.

Gaskell, Elizabeth. *Sylvia's Lovers*. J. M. Dent & Sons, 1914.

Young, George. *A History of Whitby and Streoneshalh Abbey; with a Statistical Survey of the Vicinity to the Distance of twenty-five miles*. vol. 2, Clark and Medd, 1817.

阿梶谷善久『聖と俗 塔と広場の思想』玉川大学出版部、1979年。

道重一郎「市場史に見るイギリスの近代化」山田雅彦編『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史 1 市場と流通の社会史』清文堂、2010年。

(神戸大学大学院生)

Abstract

An Analysis of the Descriptions of Monkshaven:
Isolation and Split in *Sylvia's Lovers*

Yui HIRANO

This paper aims to analyze the town of Monkshaven, the setting of the story of *Sylvia's Lovers*. This town is isolated not only geographically by the ocean and wild moors, but also spiritually by the proud sense of independence of its habitants with the wealth deriving from a whaling-trade. That is why the aristocrats in the vicinity bear ill-feelings and do not bother to help them.

Such isolation and split are emphasized in the descriptions of St. Nicholas Church and the marketplace in Monkshaven. Dr. Wilson, as a vicar, sympathizes with the gardener whose son was killed by the press-gang, but he receives a letter justifying the murder from a navy captain in his capacity as a magistrate, and is forced to make his sermon moderated. The Marketplace becomes the setting of the press-gang's first assault, and the largest-scale raid which is followed by the retaliation against it. Besides these terrible incidents, the appearances of private shops and the perverted usage as a decoy represent changing of trading and political system of Monkshaven. The mood of oppression always seems to be implied in the descriptions of such public places, making the habitants gradually frustrated and at last insane, which looks almost similar to a barbaric carnival. The confusion exposes feelings of inner-rift among the people of Monkshaven as well as its isolation.

After the hanging of Daniel Robson, the story moves from the struggles in Monkshaven to Sylvia's difficulties. Thus, using Daniel as a kind of a convex glass, the historical resistance and surrender of Monkshaven townspeople is overlapped with Sylvia's personal obstinacy and consequent tragedy. On this account, the descriptions of Monkshaven play an important role in the structure of *Sylvia's Lovers*.

